

東海4県3市および国立4大学連携防災シンポジウムを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、5月12日(土)、豊田講堂において、東海4県3市および国立4大学連携防災シンポジウム「自助・共助が息づく地域ぐるみの防災戦略」を開催しました。同シンポジウムは、東海4県と名古屋市、静岡市、浜松市、岐阜大、三重大、静岡大、本学が主催したもので、南海トラフ地震に備えるため約900名の参加者が意見を交わしました。



パネルディスカッションの様子

第1部では大村秀章愛知県知事、濱口総長によるあいさつの後、福和減災連携研究センター長が講演を行い、わが国を襲った地震被害の概要と、過去の事例を学びながら将来を考えることの重要性を説明しました。続いて林環境学研究科附属交通・都市国際研究センター長が、回復力のある地域社会を作るための要件や安全な国土の設計思想について、災害アセスメント実施の要請とスマートシュリンクの概念を紹介しました。

第2部は隈本邦彦減災連携研究センター客員教授をコーディネータとしてパネルディスカッションを行い、東海各県の国立大学と都市再生機構及び半田市岩滑自治会の代表者が、自助・共助の重要性について議論しました。鈴木康弘同センター教授は、東日本大震災における「想定外」の本質を「未想定」と断じ、再発防止に向けて減災戦略の思考プロセスを再考する、新たな「連携」の必要性を提言しました。他大学の教員からは、社会資本の維持管理を含む広い意味での防災人材育成の取り組みが紹介され、自助と共助が重要とされる防災まちづくりの実現に向けて、大学がどのように貢献するかについても活発な議論が交わされました。

奈良坂源一郎氏のブロンズ像披露式典を挙行

●博物館

博物館は、4月24日(火)、奈良坂源一郎氏のブロンズ像披露式典を挙行了しました。同式典には、濱口総長、高橋事務局長、高橋昭名誉教授、加藤詔士名誉教授、奈良坂氏のご親族などが出席しました。

奈良坂氏の胸像は、元来昭和9年に建立されましたが、戦時供出され石膏像として再建されていました。これを原

型とした再製作が、平成23年度に開催された企画展「奈良坂源一郎 蟲魚圖譜－解剖学創始者のミュージアム」を機に行われ、同館の常設展に加えられました。

式典では、吉田同館長のあいさつの後、総長と吉田館長、奈良坂氏のご親族が銅像の除幕を行いました。続いて、総長が祝辞として、医学者及び博物学者としての奈良坂氏の功績を詳しく説明し、この像が同館に展示される意義を述べました。

奈良坂氏は、解剖学などの教育により本学医学部の基礎を築くとともに、多数の医学書の執筆を通して我が国の解剖学教育の近代化に貢献しました。また、江戸時代の尾張本草学の流れを汲む博物学への造詣も深く、動物・植物・鉱物の展覧会などによる社会教育にも献身し、その集大成として明治25年に日本初の私立博物館である愛知教育博物館を創設しました。これらの功績により、「名古屋文化史上不滅の人」とも言われています。奈良坂氏が描いた博物画や手稿、書簡、写真など5,000点以上の資料が、親族などから本学博物館に寄贈され、医学史や大学史、博物館史、教育史に関わる資料として活用されています。



除幕式の様子(右から吉田館長、総長、奈良坂氏のご親族)